

「学びの3つのモード論」における 「環境」「人間関係」からの一考察

初等教育科 渡 邊 輝 美

【要旨】

乳幼児期の子どもは、身のまわりの人やものなどの環境と関わり、遊びや生活の中で主体的に探索活動などを行いながら、いろいろな経験をしていく。その経験のなかには様々な学びがあり、その学びは身体機能の発達、人間関係の発達、思考の発達など発達の側面と関連してくる。子どもは遊びや生活の中で学び、発達していくのである。

遊びの中での学びをとらえてみると、遊びながら学んだ事が思考力・判断力・表現力などを育み、知的な発達へつながると思われる。この「学び」については、三つの基本的なあり方「学びの三つのモード」があると考えられる。この「学びの三つのモード」における学び仕方については、「入り込む学び」、「眺める学び」、「想像力による学び」に分けられ、重要なことは「入り込む」経験が、「眺める」ことや「想像力」をより豊かにするということである。また、この「学びの三つのモード」には、「人間関係」と「環境」が大きく関わり、影響を与えている。

【キーワード】

「学びの三つのモード」「入り込む学び」「眺める学び」「想像力による学び」「環境」
「人間関係」

1. はじめに

認知科学による研究から、生まれたばかりの赤ちゃんは、従来考えられていた以上に周囲の環境を知覚していることが明らかになっている。(Bower T.G.R., 1974; Spelke, E.S.,2000; Fantz, R.L.,1961.1972)

未知のものや新奇なものに興味・関心をもち、それらに接近したり探索したりしようとする「好奇心」は、人生の最初期から見られる。

その好奇心が周囲の環境と関わるための大きな原動力となり、それが満たされることで発達が促される。

生後半年を過ぎる頃から、ハイハイなどによって移動することが可能となり、いろいろなものに触ったり、なめたりして物の性質を探る“探索活動”を行うようになる。

この探索的な関わりこそが、子どもの知的発達の土台になる。

探索活動においては、歩行や手足や手指の動かし方などの「身体機能の発達」、愛着関係によって養育者を安全基地とするなどの「人間関係の発達」、イメージを思い浮かべて何かに見立てるなどの「思考の発達」など、発達の側面が関連している。

このように探索行動をはじめとする「環境」との関わりは、子どもの諸側面の発達とともに変化する。この関わりの具体的な姿としては、日常の子どもの遊びの中に現れる。

乳幼児期の子どもは、日常生活の中で身のまわりの人やものなどの「環境」と関わり、遊びや生活の中で主体的に探索活動などを行いながら、いろいろな経験をしていく。そして、その経験のなかで様々な学びをしていくのである。つまり、この学びは乳幼児の身体機能の発達、人間関係の発達、思考の発達など発達の側面に関わってくると思われる。

このように子どもは遊びや生活の中で学び、発達していくのである。

遊びの中での学びをとらえてみると、遊びながら学んだ事が思考力・判断力・表現力などを育み、知的な発達へつながると思われる。

この「学び」については、三つの基本的なあり方「学びの三つのモード」無藤（2001）があると考えられる。この「学びの三つのモード」における学び仕方については、「入り込む学び」、「眺める学び」、「想像力による学び」に分けられる。また、この遊びの中での学びのあり方「学びの三つのモード」には、遊びが成立していく基盤である、子どもを取り巻く「人間関係」と「環境」が大きく関わり、影響を与えていると思われる。

2. 研究の目的

平成29年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂された。

幼稚園教育要領では、幼稚園において、生きる力の基礎を培うため、幼稚園教育の基本を踏まえ、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」を育むよう努めるものとした。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい

姿」では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域のねらい及び内容が総合的に指導される中で、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿として示された。

領域「環境」および領域「人間関係」のねらい及び内容が以下のように示された。

領域「環境」のねらい及び内容

<ねらい>

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

<内容>

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7) 身近な物を大切にすること。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

- (11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ
- (12) 幼稚園内外において国旗に親しむ。

生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

領域「人間関係」のねらい及び内容

<ねらい>

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

<内容>

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達によさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の

このような領域「環境」および領域「人間関係」のねらいや内容を踏まえると「学びの三つのモード」とは、深いつながりがあると推測される。

そこで、本研究では遊びの中でのこの「学びの三つのモード」について、保育のいろいろな遊びや生活の場面である事例の中から、具体的にはどのような姿なのかを明らかにしながら、子どもは何を学んでいるのか。その学びは基本系である「入り込む学び」「眺める学び」「想像力による学び」のどれにあたるのか。

また、その学びには子どもの遊びや生活と深い関わりがある「環境」や「人間関係」がどのように関わっているのかを探ることで、学びと「環境」や「人間関係」との関係性を明らかにしていきたい。

3. 研究主題に対する基礎的研究

(1) 「学びの3つのモード論」について

無藤(2001)は、保育のなかの子どもの学びの基本となるあり方を「学びの3つのモード論」として示している。場の中で一定の時間動き回って活動する際に、その場にあるものにさまざまな感覚を通して多様に関わり、関わり方を知る「入り込む学び」、全面的に(ものに)かわるのでなく、ある感覚に焦点を当てる「眺める学び」、他者の活動の様子や語りから経験を想像する「想像力による学び」の3つである。

この学びのモードの重要性は、子どもの育ちに沿って「入り込む」ことから「眺める」ことへ、そして「想像力」へとという流れをもつとされている点にある。

言い換えれば、周囲のさまざまな環境や人に自分自身の五感を通して多様に関わるることか

ら、ひとつの感覚に集中し、対象と距離を置いて関わるという方向性と、直接自分自身で対象に関わり知ることから、間接的に見聞きしたものに想像力によって自分を重ね合わせて知るという方向性をもつといえる。そして、重要なことは、具体的な場の中に入り込み、直接自分自身の体を通して関わるという「入り込む」経験が、「眺める」ことや「想像力」をより豊かにするということである。

(2) 「学びの3つのモード」

子どもは遊びや生活の中で日々学んでいる。その遊びの中での学びをとらえてみると、思考力・判断力・表現力などを育むなどの知的な発達へのつながりが見えてくる。

この遊びの中の「学び」には、「学びの三つのモード」(無藤2001)があり、三つの基本的なあり方「入り込む学び」「眺める学び」「想像力による学び」については、以下のように考えられている。

1) 「入り込む学び」

「入り込む」とは、場に入る・時間を過ごす・繰り返し出かける・動き回って活動する・多方面から関わりつつ見ていく・見るだけでなく触り、動かし、働きかける・何度も時間帯や時期に関わって時間的変貌を知るなど、子どもがまわりをその場の環境が取り囲み、それぞれの環境が隣接しながら次々と関わりを生むことである。

この「入り込む学び」では、すべての感覚(五感)を同時に用いて関わるのが大切で、“見る”“触る”、時には“匂う”ことにより確認される。この経験を通して生じる思考や感情は、絶えず遊びの中で動きつつ展開していく。

2) 「眺める学び」

全面的な関わりをやめ、ある感覚に焦点を合

わせて対象をとらえようとするのである。通常は、視聴覚がその働きをする。見ることに集中すると、詳細に見ることが可能になる。

そして、さらにそれを言葉にし、言葉にできると分析することも可能になる。そのことにより、要素を分ける事と、その関連を取り出すことができるようになる。

3) 「想像力による学び」

他者の言葉を介して経験を広げることである。

「入り込む学び」と「眺める学び」が体験を通して生じることであるのに対して、他者の活動の様子などから、その他者の経験を想像して、自分が経験したように感じる事と言える。

それは、自分が経験したことほど生々しくなく、細部、思考や感情についても大幅にそぎ落とされていると考えられる。つまり、実体験にはかなわないが、自分では経験しようもないことの多くを想像によって経験できる。また、実体験が簡略化されているため、得ること、学ぶことのポイントがつかみやすくなる。

これらの「学びの三つのモード」は、乳児期から人間に備わっていて、用いられているといえる。

発達とともに「入り込む学び」から「眺める学び」、そして「想像力による学び」へと進んでいく。

特に「想像力による学び」は自分で体験することに基づいてこそ豊かなものになる。

また、「眺める学び」は自分で「入り込む学び」に基づいてこそ生きたものになる。

「入り込む」と「眺める」の中間に“思い起こす事”“表現する”ことなどがある。“思い起こして表現する”ことは同時に他者への「想像力」への始まりでもある。

4) 保育における「入り込む学び」

幼稚園や保育園等は、園という環境の中に、友だち、保育者、遊具ほか必要な「環境」が揃う安全な空間である。そして、子どもはそれらに自由に関われる。つまり、子どもの力を発揮させていくことができる「環境」といえる。

園の空間に入り込み、諸々のものに囲まれ、周辺を含めて空間を使うことは、ものに関わりと同時にその空間に関わっていると言える。

そして、そのような空間が向こうから子どもにいろいろな刺激をあたえている。

様々なものに囲まれ、互いに刺激しあいながら、子どもの様々な動きを誘発する。その誘発の流れは、子どもの動き、物の配置の変化とともに変化していく。

一人の子ども動きは他の子どもの動きを誘発し、その動きに触発され、協力する姿となり、動きの関連が生まれる。園の空間で大勢の子ども動きの線が絡み合い、見事なパターンとなったり、時間と共に錯綜し、時にもつれ離れていったりすることもある。

5) 保育における「眺める学び」

子どもは動き回り、何かを見つけ、作り出し、また動き、ものを操作し、動いていく。常に全身で関わり、五感を通して感じ取っていく。時には立ち止まってぼんやり見たり、一生懸命に注視したり耳を澄ましたりする。

「眺める学び」とは、直接相手に関わるというよりも、一歩引いて相手をよくていねいにとらえていくことをいう。

めあてとなる対象を焦点とし、それ以外の空間は、ぼやけたような形になる。

「眺める」ことが次の動きを誘うものかどうかについては、面白そうだと思い、そこに向かっていけるとなれば、「眺める」ことは次に熱中する活動の準備段階ということになる。どちらにどう進んで良いのか分からないという時にも、

周りを見て、何とかヒントを探そうとする時もある。

6) 保育における他者への「想像力の学び」

自分で活動し、ほかの人の活動の様子を見るだけでなく、人の言葉から想像力を働かせ、“どうすればよいのか”“どんなことができるのか”などが分かっていく。それを「想像力の学び」と呼ぶ。

「入り込む」際の典型的な学び方は、“対象となるものを使ってその使い方を覚えていく”ことであり、「眺める学び」はその使い方について、誰かが行う様子から習い覚えるのが骨格である。

また、体を使いものを使って、再現することが“思考の過程”でもある。再現して自分のものにしていく。そのことが思考につながる。

大人の行為の様子を眺めて自分のものにする過程では、見立てやごっこ遊びなどが入ってくる。

4. 研究の方法

A市立幼稚園5歳児1クラスの平成28年・29年度の2年間における合計62名の園児から抽出した園児の観察記録および平成28年4月～2月の6事例、平成29年度4月～6月の4事例の中から抽出した事例を考察する。

5. 論考の視点

本研究では、5歳児の遊びの姿において、保育のいろいろな遊びや生活の場面である事例の中の姿から、“子どもは何を学んでいるのか”その学びは「学びの三つのモード」の基本系である「入り込む学び」「眺める学び」「想像力による学び」のどれにあたるのか。

また、その学びには「環境」や「人間関係」

がどのように関わっているのか明らかにすることで、学びと「環境」や「人間関係」との関係性を明らかにしていきたい。

6. 事例と考察

本研究では、論考の視点を踏まえ、事例より考察する。

事例1 入り込む学び

A児は、おみせやさんごっこでくじ引きやさんをすることに決めた。しかし、何をすればよいのか分からず座ってペットボトルのキャップを触りながら遊んでいる。保育者が、くじ引きやさんの幼児たちに「みんな自分のくじ引きを持ってるんだね！お客さんがやりたいくじ引きを選べるの？」と尋ねる。幼児たちは「そうで！！」と言い、それぞれが自分のつくったくじ引きを保育者に見せ始める。A児はその会話の様子を黙って見ている。保育者は他のお店に行き、しばらくしてくじ引きやさんの様子を見に行く。A児が「先生、紙ちょうだい。」と言う。保育者が「何に使うの？」と尋ねると、A児は「俺もくじ引きつくる！」と嬉しそうに言う。A児は保育者と一緒に紙を選びに行き、オレンジ色の画用紙を手取る。A児は、「先生も一緒につくろう。」と言い、保育者を自分の近くに座らせる。はさみで紙を小さく切り、数字を書き込むA児の姿を保育者が見ていると、「先生もやって！」と言う。保育者が手伝い始めると、A児は、「はずれはバツにしよう。」「1000000000は大当たりなんで！」など、嬉しそうに自分のくじ引きの説明を始める。片づけの時間になると、「先生、また続きしような。」と言い、自分のくじ引きを、くじ引きやさんのよく見えるところに置いて部屋に戻る。

A児は、友だちに乱暴な行動をとることが多い。製作活動や自分なりに工夫する遊びに苦手意識がある。また、友だちと同じように遊ぼうと思ってもうまくいかず、遊びが長続きしない。保育者は、A児が友だちと一緒に遊ぶ中で、めあてをもったり、自分なりに工夫したりすることの楽しさを感じてほしいと願い、援助を行った。そのことで、A児が自分から遊びの場に入る・時間を過ごす・繰り返し取り組んだりするなど「入り込み」、遊びの中で自分なりに考えたり、工夫したりする経験をする中で、遊びへの参加の仕方、遊び方、自分で工夫して遊び

の楽しさを学んでいった。（「入り込む学び」）

A児は、今まで自分で工夫しながら遊ぶ姿があまり見られなかった。しかし、今回は、“くじ引きをつくる”というめあてや意欲をもつことができた。A児としては、一定の時間続けて遊びに取り組むことで、自分なりに考えて作ったり、はずれや大当たりを考えたりなど工夫して作る姿があった。また、保育者が暖かく見守り、友達の様子に目を向けさせる言葉がけをすることで、A児が自信をもち、遊びにも続けて取り組めた。

事例2 眺める学び

A児は、外遊びの時間になると、お気に入りの青色の三輪車に乗り、一人で遊び始める。この日も、園庭をぐるぐると漕いで回り、一人で遊んでいる。A児は一人で三輪車に乗って、園庭を行ったり来たりして遊んでいると、小学校の入り口前のスロープ（坂道になっているところ）で三輪車をしている友だちがいることに気付く。しばらく一人で遊んだ後、A児も三輪車に乗ってスロープのところに行く。その場にいる友だちに自分から話しかけることは無いが、友だちが遊ぶ様子を見て、自分も同じように坂道を下る遊びを始める。自分で漕がなくても進むことを楽しんでいる様子である。助走をつけて乗ったり、足で漕ぎながら坂を下ったりといろいろな乗り方をして遊んでいる。A児は、「俺の方が速いよ！」「見て！」と保育者や友だちに言いながら何度も何度も繰り返し坂道を下ることを楽しんだ。しばらくその場で遊んだ後、再び園庭に戻り三輪車で遊んでいるが、途中で園庭に山のようにになっている場所があることに気付く。するとA児は、先程と同じ要領で、山の坂道を下って遊び始める。保育者が「ここも面白そうだね。」と声をかけると、「うん。」と言い、夢中で何度も坂を下り続ける。

A児は、入園当初から一人で自分のお気に入りの自転車に乗って遊んでいた。ほぼ毎日、自分から遊びの場に行き・時間を過ごす・繰り返し取り組んだりするなど「入り込み」、遊びの中で自分なりに乗り方を考えたり、工夫したりする経験を何度も繰り返し取り組んでいた。

しかし、この日はA児がその場にいる友だちに自分から話しかけることは無いが、友だちが遊ぶ“自転車を漕がなくても進む方法”を見る。友達が助走をつけて乗ったり、足で漕ぎながら

坂を下ったりといろいろな乗り方で遊んでいる様子から、A児は自分も同じように坂道を下る遊び方を始める。

友達との全面的な関わりはないが、遊び方を“見る”感覚に焦点を合わせ、対象をとらえた。つまり、A児は友達の様子から「眺める学び」により新しい遊び方を思いつくことが可能になった。

「俺の方が速いよ。」という言葉からも、今まで自信をもてずにいたA児が、自信をもって遊ぶことができ、自分の思いを保育者に話すこともできたと思われる。また、保育者がA児が新しい場所を見つけたことを認めることで、A児は自信をもち、遊びにも続けて取り組めた。

事例3 想像力による学び

外遊びの時間に、A児はS児から、「今は一緒に遊びたくない。」と言われてしまう。毎日一緒に遊ぶ仲だが、A児が毎回S児の嫌がることをしてしまうためである。A児は悲しい顔で「Sくんが一緒に遊んでくれん。」と保育者に言いに来る。保育者が「何で遊びたくないのかは聞いた？」と尋ねると、A児は「まだ聞いていない。」と言う。保育者が「じゃあAくんは、何でSくんから“遊びたくない”って言われたんだと思う？」と尋ねると、A児は「俺がいつも嫌なことするから。」と言う。そこで保育者が「自分で嫌な事してしまうって分かってるんだね。じゃあSくんにどうすれば遊んでもらえるか聞きに行ってみる？」と言うと、「行く！！」と言い、自分からS児のところへ行く。保育者がS児に「Aくんは、自分が嫌な事するから遊んでもらえないって言ってるけど、本当？」と尋ねると、S児は頷く。A児は悲しそうに話を聞いている。保育者が「今日だけ遊ばないの？それともずっと？」とS児に聞くと、「ずっとじゃない。今だけ。今日の学童の時は一緒に遊ぶ。」と答える。A児が「今も遊びたい。」と言う。しかし、S児は「今は遊ばない。」と言う。保育者が、「Sくんは、Aくんにどこを直してほしいの？」と聞くと「嫌なことせんでほしい。」と言う。A児が「わかった。嫌な事せんけん。」というが、それでもS児は「今は遊ばない。」と言い張る。すると、A児は突然怒り出し、「いいよ。勝手にすれば。俺あそこで一緒にサッカーするけん別にいいし！！もう遊ばん！！」と言う。保育者が「Aくん、そういうところをSくんは直してほしいんだよ。」という、自分が嫌なことを言ってしまったと気付いた様子で、「ごめん・・・。」と言って立ち去る。その後、A児はS児の様子を気にしながら、保育者と一緒に遊んだ。

今まで、A児が嫌なことをしても、謝れば許してくれる大好きなS児から「今は遊びたくない。」と言われ、A児は初めて自分の言動を振り返り、反省することができた。

自分の思い通りにならず、「もういい！」といらだったが、保育者の声かけにより、友だちの思いにも気づくことができた。

この事例では、A児は友だちの言葉で相手の思いに気付き、自分の行動を振り返る機会となった。つまり、大好きなS児の言葉から、友達との関わり方を学ぶ経験をすることができた。

A児は、S児の言葉や様子から、「もし自分だったらどんな気持ちか」という相手の気持ちを想像し、考える経験をした。（「想像力学び」）今後、A児が相手の気持ちを自分の事として考えながら関わるきっかけになったといえる。

事例4 入り込む遊びと「環境」との関わり

B児は、友だちと一緒に時間をかけて積み木でお城をつくりあげた。遊んだ後に保育者が、積み木でつくったものを飾るコーナーをつくり、そこにB児もお城を飾った。周りの友だちがB児のつくったお城を見ており、B児はとても満足した様子で部屋に戻った。

給食の準備時間に、K児が積み木のコーナーにぶつかり、B児がつくったお城を壊してしまう。ぶつかったK児がそのことを謝りに来ると、B児はすぐに「いいよ。」と言って友だちを許した。その後、B児は担任にその出来事を報告に来る。

B児：「先生、K君がね、僕がつくった積み木にぶつかったから壊れたんだって。でもね、別にいいから僕許してあげた。」

保育者：「頑張ってたつきたから残念だね。でもB君、許してあげられるのすごく優しいね。」

B児：「別にいい。」

保育者：「そうなんだ。またつくるの？」

B児：「うん。またつくればいい。」と言い、B児は普段と何も変わらない様子で給食を食べ始める。

次の日、B児は壊れたお城をつくり直せるように机の上に倒れた積み木を並べると、すぐにお城を修理する。「一人でできるかなあ。」と呟きながら夢中でつくり、出来上がると、保育者に「つくり終わったよ！」と報告をする。保育者は再び積み木をコーナーに飾る。

B児は、友だちと一緒に時間をかけて積み木

のお城をつくりあげた。自分から遊びの場に入る・時間を過ごす・繰り返し取り組んだりするなど「入り込み」、遊びの中で自分なりに考えたり、工夫したりする経験をし、自分で考えて遊びを作り上げていく楽しさを学んでいった。

保育者が、B児がつくった“作品を飾れる場所”を作ることで、たくさんの友だちにB児のお城を見せることができた。この「環境」により、B児は満足感を味わうことができた。

また、保育者がじっくり遊びを考えることのできる“時間を保障する”という、もう一つの「環境」も整えたことが、B児の考える力を育て、お城を作った充実感や自信にもつながった。

その後、保育者が「許してあげられるのすごく優しいね。」と認める声かけをして温かく見守ることで、B児は気持ちを立て直し、再び遊びに取り組むことができた。そして、結果的には、B児が「またできた!」「つくり終わったよ!」と自分の思いを保育者に話す姿となり、達成感を感じることもできた。

このように、思い通りにならない体験があっても、支える保育者との「人間関係」により、思いを立て直し、再び続けて取り組む姿となり、成し遂げる充実感を味わい、自信をもつことができた。

<考察>

入り込む学びと「環境」との関わり

入り込む学びには、それを実現にするための「もの」やそれを行うことを可能にする（支える）保育者などの「人」、そして、「場に入る・時間を過ごす・繰り返し出かける・動き回って活動する・何度も時間帯や時期に関わって時間的変貌を知る」などを可能にする「じっくり取り組むことができる時間」を保障するという「環境」づくりも重要になると思われる。

刺激となり、支える「人間関係」とじっくりと遊びに取り組める「環境」が基盤となり、「入

り込む学び」は成立すると思われる。

事例5 眺める学びと「人間関係」との関わり

キングブロックで作った10人乗りの長い電車に乗って遊んでいる場面。B児は先頭に座り、電車が出発するのを待っている。保育者が「この電車どうやって動かすの?」と電車に乗っている友だちに尋ねると、K児が「運転手になってあげる!」と言い、電車を引っ張り始める。しかし、電車は全く進まない。保育者が「あれ?今日は動かないね。」と言うと、K児が電車のタイヤが外れていることに気付く。壊れた部分を修理するため、K児はB児に「ちょっと降りて。」と言う。しかし、B児はなぜ降りるのか分からず、「え～嫌だな～。俺ここに乗りたくない。」と言う。K児は「なんで!降りて!」と再びB児に言うが、B児は「え～。」と嫌そうな表情で降りようとしな。保育者がK児に「なんで降りないといけな。いは言ったの?」と声かけすると、K児はB児に対し、「ここ壊れてるから一回降りて!」と言い換える。すると、B児は笑顔になり「なんだ。そういうことか。」と言い電車を下りる。そして、K児が修理する様子を見ていたB児だが、K児がなかなか修理できないことに気付く。B児は「これ一回外したほうがいいんじゃない?」とK児に言い、修理を手伝い始める。

B児はK児と一緒に電車の壊れている部分を修理しようとする。しかし、電車にまだ5人乗っているため、持ち上げられず、ブロックをはめることができない。B児は「できないなあ。」とつぶやく。保育者が「なんでかなあ。」と言うと、B児は「だってみんなが乗ってるから重くて持ち上げられん。」と言う。B児は乗っている友だちに降りてほしいと思っているが、それを言えずにいる。保育者がB児に「修理するからみんなにも降りてもらったら?」と言うが、「う～ん。」と言いつつ何度も電車を持ち上げてみようとする。すると、K児が電車に乗っている友だちに「ちょっと降りて!」と声をかけ、無事に電車を修理することができた。保育者が「2人で修理できたね!やっとな電車に乗れる!」と声をかけると、B児は満足した様子で「よっしゃ!乗ろう!」と言い、電車に乗って遊び始める。

B児は、何日も前から繰り返し電車ごっこ遊びの場に出かけ、友だちや遊びの様子をじっと見て「眺めて」いた。そのことで、遊びの様子や遊び方、面白さを学んだ。〔眺める学び〕そして、自分も“電車に乗りたい”という思いを高め、この日一人でお客として電車に乗って遊び始めた。この日は、以前からこの遊びのメンバーであったK児が電車の修理を始めても、B児は気にせずに電車に乗り、動くのを待つだけだった。

しかし、K児から、「修理したいから降りて。」
と思いを伝えられたことで、友だちがしている
ことにも目を向けることができた。

さらに、“電車に乗って遊びたい”という強い思
いもあり、K児に「これ一回外したほうがいい
んじゃない？」と電車を修理する方法をB児な
りにいろいろと考え、アイデアをだし一緒に電
車を修理する姿になった。

友だちが乗っている場面では、保育者がB児
の思いを友だちに伝えられる場を設定すること
で「だって、みんなが乗っているから重くて持
ち上げられん。」と自分の困っていることを友
達に話すことができ、互いに思いを伝えあう姿
になった。

「眺める学び」により“やってみたい”と心が
動いた経験が、自分で取り組む姿や考えたこと
を「伝えたい」と思うきっかけになった。

<考察>

「眺める学びと「人間関係」との関わり」について

「眺める学び」では、友だちや保育者などの「人
間関係」が存在することが大きな出発点となる。

その人々の行動や様子がきっかけとなって、
場に出かけ、様々なことを眺めたり、聞いたり
しながら自分の経験を広げ、学びを行う姿にな
ると思われる。

いつも遊びや生活を共にするまわりの友だち
や保育者に対して、絶対的な安心感や信頼感を
もつ「人間関係」が、“行ってみたい”“やって
みたい”“見てみたい”などの「眺める学び」に
つながる行動のきっかけや原動力になると思わ
れる。

事例6 想像力による学びと「環境」「人間関係」 の関わり

ジュウオウジャーの曲に合わせて、段ボールでつ
くった太鼓を叩いている場面。
B児が太鼓を叩いていると、ステージで踊ってい

たT児が近づいてくる。B児は、「こうやって叩く
んだよ。」と太鼓を優しく叩きながら、T児に太鼓
の叩き方を知らせる。

T児はB児が言っていることを気にせずに、太鼓
を力強く叩き続ける。T児は太鼓に体重をかける
などして、手荒く扱う。

B児は「そんなことしたら太鼓がつぶれるよ！」「な
んでするの！」と言いながら、太鼓を手で押さえ
て壊れないようにする。T児は段ボールを押すこ
とはやめるが、相変わらず強く叩き続ける。B児は、
「そんなんじゃないよ。優しく。」とT児に伝える。

~~~~~  
遊びの話し合い（クラスでの）の場面

教師：「Bくん、さっき言ったこと、（友だちに）  
教えてあげて。」

B児：「強く叩いたり優しく叩いたりした。」

教師：「音が何か違った？」

B児：「強く叩いたら鬼みたいで、まああの力で  
叩いてみたら、足音みたいやった。」

教師：「いろんなやり方でいろんな音が出たんだ  
ね。」：「明日は何をするの？」

B児：「歌も太鼓もする！今日と違う強さで叩く！」

入園当初、B児は友だちに対して「○○して  
ほしい。」等の困りや要求を伝える姿はあまり  
見られなかった。しかし、この事例では、相手  
が仲の良いT児であったこともあり、安心して  
自分の思いを伝えることができた。また、T児  
が乱暴に叩く姿から、B児は自分がどのように  
叩けば太鼓を大事にできるのかを学んだ。（「想  
像力による学び」）

T児がやってみた太鼓の叩き方から、今度自  
分叩くときの叩き方について想像し、「優し  
く・強く」「鬼みたい」「足音みたい」と自分  
の考え、イメージしたことを友だちや保育者に伝  
わるように、自分なりの表現をすることができ  
ている。

仲の良いT児は、B児にとって望ましくない  
行動をとったが、そのことで、B児は自分の気  
持の伝え方や、どのような遊び方が望ましい  
のかを学ぶことができた。T児との関わりを通  
して、自分一人ではできない経験をすることが  
できた。

## <考察>

### 想像力による学びと「環境」「人間関係」の関わりについて

「想像力による学び」は、自分で活動し、ほかの人の活動の様子を見るだけでなく、人の行動や言葉から想像力を働かせ、自分はどうすればよいのか、どんなことができるのかが分かっていくことである。

まず、「想像力による学び」のはじまりとなる自分で活動し、考えたり工夫したりする「入り込む」状況になるためには、B児の「太鼓を作りたい」というような“めあて”をもてるような「環境」と出会うことがきっかけとして欠かせない。それは、友だちや素材、太鼓に対する今までの経験などである。

また、太鼓の使い方について、T児が行っている様子を見て、B児が望ましい使い方を習い覚えるのが「眺める学び」である。

これには日頃から仲の良いT児という存在、つまり「人間関係」が大きく影響を及ぼしている。

このようなB児は「入り込む学び」から「眺める学び」さらには、正しい叩き方を想像し、友だちや保育者に伝わるように、自分なりに表現するという「想像力による学び」の姿となった。

「想像力による学び」に関しては、日頃より仲が良いが、思いがなかなか伝わらないT児という存在や、友だちの思いに気付けるような声かけをする保育者との信頼感に基づいた「人間関係」がすべての始まりであり、B児の学びを支える絶対的な基盤となっている。

## 7. 研究のまとめ

「学びの三つのモード」については、「入り込む学び」が最も根底にあり、その中から「眺める学び」と「想像力による学び」が生まれてくる。

「眺める学び」と「想像力による学び」は、出発において“入り込む”ところから始まるだけでなく、豊かになり、自律した学びの形態になる。

“入り込む”ところへ再三にわたり戻り、始まり直すことを通して発達していく。

保育においては、学びのモードを経験する機会を用意し、多様に展開できるようにすること、同時にそれらの間に関連を持たせ、互いに参照し、つながるようにすることが大事である。

好奇心や探求心、知性と感性も、各々の「学びのモード」の関連の中で育つものである。

また、この「学びの三つのモード」が成立する基盤に「環境」や「人間関係」がある。

日々の遊びや生活の中には、子どもを取り巻く多様な「環境」や「人間関係」が存在する。

子どもその「環境」や「人間関係」をきっかけ、または原動力や基盤として、自らが進んで遊びに主体的に働きかけることができる。その遊びの中での経験により、「入り込む学び」「眺める学び」と「想像力による学び」が生まれてくると考える。

そして、この3つの学びは、子どもの身体機能の発達、人間関係の発達、思考の発達など発達を促す。

つまり、子どもの心身の発達を可能にするものがこの「学びの三つのモード」である。

## 引用参考文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」(2018)
- 2) 厚生労働省「保育所保育指針」(2018)
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(2018)
- 4) 無藤 隆「知的好奇心を育てる保育 学びの3つのモード論」(2001 フレーベル館)
- 5) 無藤 隆監修 福元真由美編者代表「事例で学ぶ保育内容 領域 環境」(2007 萌文書林) PP46-48.
- 6) 別府市立境川幼稚園「別府市幼稚園教育実践研究発表事業に係る公開研究発表会 研究のあゆみ」(2017) PP 7-12、PP23-26.